

# 人間ドック健診施設機能評価 Ver.4 総合評価

施設名： 杏林大学医学部付属病院 人間ドック

## 受審施設の概要

杏林大学医学部付属病院 人間ドックは、東京都三鷹市にある病院併設型の健診機関である。病院は、1954年に母体となる三鷹新川病院として開院され、1970年に杏林大学医学部付属病院となり、人間ドックセンターは1998年に開設された。2012年に全面改装をおこない、一部検査を除き外来とは独立した形で1日人間ドックを実施している。大学病院併設型のメリットを活かした連携によりドック受診後のフォローを行い、包括的な健康管理ができる仕組みが構築されている。

年間の受診者数は、一日ドック約1,180人実施している。今回Ver. 4での初回認定審査である。

## 第1領域 理念達成に向けた組織運営

人間ドックセンターとしての理念と基本方針が定められ、施設内外に周知している。

就業規則等各種規程は、法人で体系的に一括管理されている。職業倫理については、就業規則内で明文化されているものの、違反行為に関する相談窓口人事、庶務、看護とそれぞれにあり、対応している。中期経営計画・年度事業計画・予算書等は、病院全体の計画の中に健診部門として作成されている。中長期計画に基づき、健診部門としての単年度計画の作成、運用等、今後も継続的な検討をお願いしたい。また、受診者や保険者のニーズには、健診業務に関する会議「人間ドック運営委員会」が開催され、対応している。

職員体制は、健診専任医師は日本人間ドック学会に所属し、人間ドック認定医の新規取得に向けて活動も積極的に行っている。スタッフは病院兼務職員も多いが、超音波検査士、検診マンモグラフィ撮影認定技師等の専門資格取得者が対応し、各部署間の連携がよく、チーム医療が実践されている。健診専任スタッフが、人間ドックアドバイザー来期取得予定で準備を進めている。教育体制については、院内年間計画に基づき充実した形で構築されている。一方で、健診に関する外部研修への参加については、職員の業務分担等の理由もあり十分な参加人数が確保出来ていない状況のため、今後の改善に期待がもたれる。

医療安全管理体制については、委員会が設置されマニュアルも整備されている。分析結果等をリスクマネジメント活動報告書として毎月発行し、啓発活動にも積極的である。感染管理や安全衛生管理の体制は適切である。

情報の管理体制は、病院として情報システム管理を、「病院情報システム運用管理規程」により行い、サーバー室への入退室管理やパスワードによる健診システムへのアクセス制限等適切である。職員が携帯している「院内安全マニュアル（ポケットマニュアル）」が多分野の周知と、見える化のツールとして大きな役割を果たしている。

高齢者や障害者等、配慮が必要な受診者への対応については、全館がバリアフリー化されている。外国人受診者の受け入れ体制については、日本語の対応が可能な場合のみ受入れる体制である。

## 第2領域 受診者中心の良質な健診の実践

予約・受付の業務は、マニュアルに沿って実施されている。収受業務はダブルチェックが確実になされ、記録も含めて適切である。会計処理は法人の経理課が担当し、売上や未収金等についての実績が毎月経営管理会議等に報告され検討が行われている。

人間ドック学会が提示する基本検査項目は提供されている。大学病院の特性を生かし、多彩な画像検査のオプションを備えている。

受診環境は、良好である。センター内で行う検査が身体計測、心電図、エコー検査、肺機能検査、採血に限られ、他は付属する大学病院で行われている。病院への移動距離は長く、動線が複雑なことは否めない。しかし案内や待合室の配置により一般患者との遭遇を避け、受診者も迷うことはない。また、センタースタッフが送迎する等配慮が伺われる。受診に関する事前の情報提供は、ホームページや事前に送付される書類によって、受診者へ行われている。検査の安全性の確保のため、受診当日は、医師、看護師による医療面接によりアレルギー、既往歴と共に体調を含めた多くの情報が収集されている。得られた情報は、電子カルテ内で共有され、その後の健診に寄与している。また、内視鏡検査では事前に説明書が渡され、署名による同意を得ている。急変時の対応としては、病院と連携したコール体制が整備されている。

院内の検査部門はそれぞれ独立しており精度管理体制は適切で、検査毎に責任者を置き、業務マニュアルに基づいて管理が行われている。外部精度管理サーベイへも参加し良好な成績を得ている。検査結果の判定は、人間ドック学会の判定区分に準拠している。なお、画像の判定は専門医と常勤医による二重読影が実施されている。過去画像との比較も行われ、精度の高い画像診断を提供している。医師による結果説明は、2017年度実績は63.1%であったが、2018年度はさらに高い数字をあげており、今後も継続されることを期待する。人間ドック特別コースの受診者に対しては午後から30分ほどかけて画像の説明を含めた全ての項目についての説明が行われており、人間ドック一般コースの受診者には午前中に画像を除く結果説明を行っている。

結果に基づく指導については、看護師と管理栄養士2名の体制で、原則全受診者に対し対応されている。指導マニュアルもあり、実際の流れも業務手順に基づき標準化されている。内容は生活・運動・禁煙・減酒などの各種指導に加え、受診前数日の食事調査票をもとにした栄養指導が充実しており特筆される。ただし、現在の指導体制は、当日の進行状況に応じて指導を行うため、医師の結果説明前に行うケースも多いとのことであり、今後は結果に基づく指導体制として構築されるとより良いと思われる。

## 第3領域 継続的な質改善の取り組み

今回の受審を機に受診者更衣室内にご意見箱を配置するなど、受診者からの意見や要望の把握体制が強化されたことは評価でき、今後の成果が期待される。

フォローアップについては、大学病院に併設している強みもあり、受診日当日に精密検査の予約が可能であり、高い精検受診率を誇っている。

健診結果の分析は継続的に行われている。今年度は日本人間ドック学会学術大会で、複数の発表が行われている。乳癌学会、消化器がん検診学会等へのがん登録が行われていない。

受診者に向けた有用な情報提供としては、施設内掲示において、栄養情報のパンフレット等や疾病情報を提供している。地域住民向けには、「体づくりでがん予防」と題して健診医師が三鷹市民を対象に講演を行っている。

健康経営にむけた取り組みとしては、紙媒体での、ドック結果等を契約事業所に送付している。独自の年報はなく、病院と一体型の年報にて報告を行っている。結果を電子データ化して提供する仕組みはまだ構築されておらず、今後の継続的な検討を期待したい。

業務改善の体制としては、受診者満足度向上に向けた目標を掲げ、ドック運営会議（年3回）を通し、関連部署に協力を要請している。その結果についても同会議で周知し、次年度の年間目標へ反映させて業務改善に取り組まれている。

## **総括**

人間ドックの充実に向けて、顧客のニーズに向き合い、病院併設型のメリットを活かした運営は、フォローの充実に大きな効果が見られる。人間ドック健診施設としての方向性についても、病院、健診一体となって受診者の全人的な健康管理と健康教育目指していく姿勢と、その方針が職員にも浸透しており、今後の発展を大きく期待できる施設である。

総合的見地から、人間ドック健診施設機能評価の認定（新規）に値すると判断する。

審査日 2018年11月8日

認定承認日 2018年11月24日